

ずい 隋・7世紀／ちえい 智永（生没年不詳）

（教科書 64・65 ページ）



概要・特徴

「真草千字文」は、楷書（真書）と草書とを対比させて「千字文」（重複しない1,000文字から成り、250の四字句を組み合わせたもの）を書いたもので、草書を習得するための手本としての性格をもつ。日本の「いろは歌」のように、識字のための教材として古くから用いられた。教科書に掲載の「真草千字文」は、会稽（現在の浙江省）の僧侶であった智永が多数の「千字文」を書いたうちの1本といわれるが、智永の落款（作者の署名・捺印）がないために、王羲之の書として、奈良時代に日本に伝わったとされる。国宝。

王羲之書を忠実に学び伝える規範的な書きぶりで統一されている。自然で正しい柔らかな用筆で書かれており、草書を学ぶうえでの最良の手本となっている。

作者について

智永は、中国の6世紀～7世紀初めの僧侶。会稽の出身で、王羲之7世の孫とされる。陳から隋代にかけて活躍し、在世時から書の名人として知られた。兄とともに出家して永欣寺にこもり、30年間にわたって800本余りの「千字文」を書いたと伝えられる。

智永の書は在世時から人気が高く、人々がその書を求めて争うように永欣寺に集まり、入口の敷居がすぐにすり減ってしまうので、敷居を鉄板で補強したと伝えられることから「鉄門限」と異名がつくなど、多くの逸話がある。「初唐の三大家」の一人である虞世南に、王羲之書を伝授したともいわれる。

時代背景

隋代には、約280年ぶりに中国が統一され、南北に分断されてきた文化の統一が進んだ。楷書の書法が発展的な融合を遂げて洗練の度合いを高め、墓誌銘（石などに文章を刻んで墓の中に納めたもの）などに数多くの名品が誕生した。そのような時代の中で、王羲之の子孫である智永は、数多くの「真草千字文」を書き、王羲之書を後世に伝える重要な役割を果たした。